

シラスウナギが近年にない豊漁 これをまんが悪いと思うかチャンスと捉えるか

新型コロナウイルスで高級店も軒並み休業中のこの時期に、ここ数年間新聞紙上ににぎわしてきた「ウナギ資源の枯渇」に関連するニュースが掲載された。「シラスウナギ近年にない豊漁」である。平常時であれば、これはきっと大ニュースとして取り扱われたことは間違いないが、今年はそのところではない。従って、この関連記事はおそらくは出されることはないものと考えられる。

タイミングが悪い、これを播州弁では「まんが悪い」というが、本当にこの言葉がぴったりである。おそらく、今年はウナギの消費も抑えられる。ウナギを待ち望んだ養殖業者、ウナギ販売店、そして消費者にとっては残念な年となる可能性は大である。消費に回されない部分を放流に回して親ウナギを育ててウナギ資源を増やす、大きなチャンスととらえたい。

播州弁 - Wikipedia

播州弁 (ばんしゅうべん) まんがええ・まんがわるい - 【形】巡り合わせがよい・悪い、運・タイミングがよい・悪いという意味合いを含む

関連ブログ

近畿大学はウナギの完全養殖事業に成功するか？

乗り越えるべきは費用の壁 2019.11.2

<http://www.alchemist.jp/Blog/191102.pdf>

3年後に「うなぎ」の完全養殖が実現する

日本人は成し遂げる 2014.7.19

https://alchemist-jp.at.webry.info/201407/article_19.html

神戸新聞 2020年(令和2年)4月22日

不漁が続いていたニホンウナギの稚魚、シラスウナギが、近年にない豊漁に恵まれている。これを来年以降につなげようと、加古川漁業協同組合(西脇市野村町)は21日、加古川市の加古川河口で採取したシラスウナギ約4千匹を加古川上・中流に放流した。同組合は近年にない

加古川漁業協同組合

よる稚魚の放流は初めて。
ニホンウナギは絶滅危惧種に指定されている。生態には不明な点が多いが、日本から約2千キロ離れたマリアナ諸島付近の海域で産卵。ふ化した稚魚が日本など東アジア各地の河口にやって来て、淡水域で5〜15年ほど暮らすとい

シラスウナギ 豊漁

河口で採取 → 上・中流に放流

同組合は毎年、5月下旬から6月上旬にかけ、約1500匹の成魚を放流してきた。だが今年、理由はよく分からないが、全国的にシラスウナギが豊漁で、加古川下流でも3、4月にかんりの量が捕獲できた。
シラスウナギは1キロで7千〜8千匹はおり、この日は同組合事務所役員に配り、加古川本流や野間川などイカ所に放流した。かつては北播磨のあらゆる河川に生息していたというニホンウナギ。同組合の渡辺昭良組合長は「暗い話が多い時期だが、将来のウナギの成長を楽しみにしてもらいたい」と話していた。(長瀬麻子)



加古川などに放流されたシラスウナギ=加古川漁業協同組合

日本国内、ウナギ天然産量産出統計 1957-2015 (単位: トン)

